



関川 演説もしなければいけないときが出てくるでしょう。

鶴見 だから、首くくりたくなるわけ。

そのときにアメリカの軍隊から脱走兵が出た。これは闇夜中の行動だから運動の中の慰めなんだよね。あのときにただで助けてくれた十八、十九、二十歳の日本の少年たちがいるでしょう、関川さん、あなたと付き合いのある人たちだ。わたしは、その人たちに対する恩義と感謝の念をいまも持っている。

関川 ようやく、あの一件のバックグラウンドがわかりました。謎だったな、永い間の。

鶴見 パラドックスなんだよ。人がたくさんいると喜んでやるけど、わたしは耐えがたかったね。

関川 率直な話、小田さんとは温度差があつたわけですか。

鶴見 あの運動をやるうといいだしたのは高島通敏（政治学者。一九三三―二〇〇四）なんです。

アメリカの北爆が広がってきたあるときに（一九六五年）、わたしのところにやって来たんだ。その前に「声なき声」という運動があつたでしょう。その集まりが、デモをやってももう七人ぐらいになっちゃったころでね。

関川 一九六〇年の安保闘争で生まれた運動ですね。

鶴見 そうです。さつき埴谷さんに少しふれたんだけど、小林トミさんが代表でね。七人、八人しか集まらなくなっちゃっていた。でも、アメリカのベトナム爆撃というのはあんまりだ

から、北爆ですね、これで、もういつべん運動を新しく無党派でやるうといつたんです。高島からわたし、わたしから従兄弟の鶴見良行（人類学者。一九二六―一九四）、彼らのつながりのある人たちに来てもらい集まってる。「新しい運動は新しい代表でやるう」という提案だった。その会は、東京の学士会館でやった。そのとき、杉山龍丸（一九一九―一九八七）が来ていた。

夢野久作（作家。一八八九―一九三六）の息子です。初めからいたんだよ。

関川 お祖父さんが右翼の巨頭の杉山茂丸（一八六四―一九三五）ですね。

鶴見 そうです。杉山龍丸もベトナム戦争反対なんだよね。わたしは、「この運動の代表には、安保のときにリーダーでなかった人になつてもらおう。小田実に頼もうと思う」といった。

そしたらわたしに白紙委任状を出してくれたんだ。わたしは、小田と付き合いはなかったんだけど、高島とわたしとで新橋で会つたときは、彼はもう最初のビラを書いていたんだ。小田は初めから入って来た。それから始まる。小田は三十歳そこそこで、その後河出書房新社から全集を出すんだけど、そのお金を全部運動に入れるんだ。小田のその気合が若い人に伝播していく。どんどん、どんどん運動が大きくなっていくんだ。毎週、毎週、新しいレベル連というのが全国のどこかの町で作られている。つまり、アラビアンナイトなんだよ。瓶の蓋を開けたら巨人を引き出しちゃった。わたしが予想もつかないような巨人で、それがものすごい勢いで働き、七人くらいだった集団を百万人にした。ほんとアラビアンナイトなんだ。

わたしにとって喜ばしいといえは喜ばしいんだけど、悪夢でもあるわけだ、わたし個人にとっては。わたしは一個の悪党なんだから悪党にとっては困る。だけど、引き出した関係上は逃れられない。

関川 ランプをこすって出してしまった巨人は、もう元には戻りませんね。

鶴見 当時、共産党は収入の一〇パーセントを組織に入れるというけど、実はあの頃、わたしは六〇パーセントまで出していたと思う。経済的には破綻に瀕し、肉体的には演説して回るので高血圧で参っちゃやし、もう死ぬか、とね。わたしの細君は心臓病になって、いま、ペースメーカーを入れているんだけど、彼女は、いつ誰が家に来て飯を食べられるようにしていた。十八、九の少年が、みんなただで働いているんだから、誰が来たって飯が食えるようにするのは当然だ。

関川 生活が破綻するほどの広がり方でしたね。

鶴見 大変なものだった、全然予想がつかない。

関川 同時に最初の動機とは違うというか、穏やかな人たちではあるが、だんだんと正義に近づいてきましたね。

鶴見 (笑) それはもうそう。正義にはかなわないんだよ。

関川 鶴見さんの最初の気持ちとはだいぶずれる。後半には。

鶴見 脱走兵との付き合いが、わたしにとってよかったんだ。脱走兵って、もともと不良少年

なんだね。気分が合うんだよ(笑)。

関川 意図して皮肉ない方しますが、ベ平連が大きくなってからあとは、武装なき軍隊の正義のようになっちゃったんじゃないですか。

鶴見 ベ平連はそうです。脱走兵援助というのは別組織ですから、隠れた組織。これは妙なことに日本ではほとんど前例がない運動でね。あるとすれば、米騒動なんだけどもね。つまり、女性を中心にいる運動だった。全学連とか学生運動とは全然違う。学生運動では男のリーダーが女の学生を顎で使えるところでしょう。それと脱走兵援助は全然違う。脱走兵をかくまっている家庭で、彼らと向き合っているのは女性なんだから、主婦なんだ。脱走兵と二人で暮らして飯を食わせてね、最後の脱走兵脱出の指揮も女性が執った。

関川 後半は、わたしがのちに知り合いになる青年たちが指揮を執ったんじゃないんですか。

鶴見 脱出のときの最高のリーダーは女性だった。

関川 そうだったんですか。私の友人たちは彼女の下にいたんですね。

鶴見 そうです。

関川 そうすると、わたしたちが持っていたベ平連のイメージと全然違いますね。

鶴見 逆回りの運動なんだ。こちらは、わたしにとって魂の慰めになるわけだ(笑)。

関川 ベ平連は苦しみだった?

鶴見 責任があるでしょう、瓶の蓋を開けちゃったんだから。瓶から小田実という巨人が出て

きたんだから。

関川 でも、悪意で開けたわけじゃない。

それはそれとして、身を引かれるという手はなかったんですか。

鶴見 それでは背信行為じゃないの。小田に電話かけて「なつてくれ」といって、途中でわたしが逃げだしちゃったら。

関川 ベ平連が、もしあと十年続いていたらどうだったでしょう？

鶴見 死んだでしょう。つまり、経済的に追い詰められ、そして肉体的にも血圧なんかでやられているでしょうね。心臓病は出ているし、それで終わり。死んだと思う。だから、ベトナム人民に助けられたんだよ。ベトナム人民勝利、ほんとんどベトナム人民に対する感謝です。

関川 北ベトナムが勝ってくれたから終わった。

鶴見 助かった。

関川 八年でよかったですね。もつと長い戦争にならなくて。

鶴見 運がよかったですね。政治運動については、大体いままでは運がいい。

大村収容所廃止運動

鶴見 そのベ平連の中から派生して出てくるのが「大村収容所廃止への運動」なんだね。アメ

リカの脱走兵を見ている、アジア人から脱走兵が出てくると思っていなかったんだ。ただ、韓国がベトナムに派兵したでしょう、ものすごく残酷な軍隊を作って。それをいやだと思ふ韓国兵が出てきたんだ。その人は金東希（きんとうき）という兵隊で、日本に来たら捕まり九州にある大村収容所に送られた。

関川 そうですね、過剰なまでの韓国軍の勇猛さはベトナム戦争でもよく知られるところでした。

鶴見 大村収容所があるということは、それまで知らなかった。新聞で知った。もしたら、わたしのところに電報が来たんだ。「この人を助けなければ、あなたがいままでやったことが無駄になる。柴田」と書いてあるんだよね。わたしは、柴田道子（作家。一九三四〜七五）だろうと思つて「趣旨はわかつた、この運動に参加する」と長野に電報をうつた。柴田道子は長野に住んでいたからね。その柴田さんから電報が来て、「何のことかわからない」というんだ。柴田道子じゃなかったんだね。

関川 別人だったんですか。

鶴見 運動の中のどこかにいる人が、わたしに電報をうってきた。

関川 完全に無名の人ですね。

鶴見 それが、わたしを動かしたわけだ。金東希という兵長だけでも、熊本では白井さんというクリスチャンの教授が救援活動を始めた。

……この運動にとって京都が有利だったんですよ。京都の清水寺に九十を超した大西良慶（二八七五～一九八三）というお坊さんがいて、百歳以上生きるんだけど、その人が動いてくれた。教務部長をやっている福岡精道、もう亡くなっただが、この人も熱心に動いてくれて、偶然、その時の法務大臣が清水寺の檀家総代だった田中伊三次（一九〇六～八七）さんだった。なかなかの人物ですよ。最後、自民党から離脱して一人で当選するんです。大西さんが、その田中さんにわたしの見る前で、手紙を書いてくれたんです。わたしは、それを持って田中伊三次さんに会いに行った。

田中伊三次さんが京都へ戻ってくるときに、大西さんの代わりに教務部の福岡精道、それからクリスチャンで同志社の和田洋一（ドイツ文学者。一九〇三～九三）、女性で岡部伊都子（作家。一九三三～二〇〇八）、もう一人お坊さんで法然院の管長の橋本峰雄。この四人が田中伊三次さんを訪問して、金東希のことを頼んだ。つまり、韓国送りにならないように、とね。彼は「悪いようにはしない」といいましたよ。それだけでなく、彼は努力して金東希を北朝鮮送りまで持っていた。それは大変なことです。

関川 すごいメンバーですね。右も左もない。それで金東希は大村収容所を出た後、北に行っただんですよ。その後、金東希がどうなったかご存じですか。

鶴見 かなり長い間、金東希は優遇されていた。いまはどうなっているか知らない。

関川 死んだ、という証言が間接的ですが、二件ほどありました。殺されたのだと思います。

その当時、北のシステムについてはみなさん好意的に見られていたんでしょうか。

鶴見 ベトナム戦争については、北はベトナム戦争に派兵していないという事実があります。

韓国に行けば死刑になるか拷問を受けるのを、北に行けば、少なくともその当座は歓迎されたでしょう。一番いいのは、金東希の親類が日本にとどまることでした。

関川 それはできなかったんですか。

鶴見 それはできなかった。そのときの日本内部の政治の圧力です。だけど、そのことよって大村収容所というものがあることがわかった。つまり、韓国から難民をそこに入れるためにできている組織があるということを知ったんだ。

それから、ああいう収容所をやるための運動というものを起こして、この部屋（自宅の一室）で、ずーっと編集してきたのが『朝鮮人』という雑誌。そのへんに一冊、あるでしょう。

関川 その雑誌には、李進熙さんはいたのですか。

鶴見 初めの中心は飯沼二郎京大教授。飯沼さんが、それを二一号まで出した。それからわたしが引き継いで、この部屋で作っていた。これは、わたしの代になってからのサンプルですが、ナンバー・二四、二五、二六と二七、ここでやめた。なぜやめたかというのと、韓国の難民だけを置く場所としての大村収容所は事実上なくなったからですね。それは仲間の弁護士の小野誠之が行って確かめました。だから、「大村収容所を廃止するために」というスロー

ガンからいっても目的は達したので、そこで止めたんです。

関川 息の長い雑誌ですね、一年に一回とか、二年に一回とか。

鶴見 とにかくそれは続けた。表紙は須田剋太（画家。一九〇六―九〇）が毎号、ただで描いてくれました。

関川 須田剋太さんは、司馬（遼太郎・小説家。一九三三―九六）さんとずいぶん長い間仕事をされた人ですね。

鶴見 そうそう。司馬さんの『街道をゆく』ですね。その須田剋太とわたしのつき合いも飯沼さんを通じてですが、それで生じたんです。彼は常にこの『朝鮮人』にただで描いてくれた。大村收容所がなくなった背景には、韓国が経済力が上がってきたからでしょう。

関川 もう密航はありませんからね。

鶴見 それで、雑誌『朝鮮人』は終わり。

関川 朴正熙の経済政策の成果が、はつきり現われました。ね、そのあたりから。

鶴見 むしろ、北朝鮮のほうがいろんな問題をもってきたでしょう。あなたの書かれたこの『退屈な迷宮』というのはとても面白い本で、南も北も両方見渡し、こういうタイトルの結論に達したんでしょう。わたしたちの方は、在日朝鮮人、大村收容所にいる人を含めてですから、在日朝鮮人以外のことは知らない。韓国がどうか、北朝鮮はどうかということはいわないんだ。それに限定したから、『朝鮮人』をやめることができました。無限定にはし

ない。無限定というのは、なるべく避けたいね。だけど、結論からいえば、素材と視野は違うけれども、考え方は、ほぼ同じところですね。

日本の中で在日朝鮮人はどういうふうにされてきたか。差別を見逃していけば、日本人のためにならないでしょう。日本の中にいる一番大きな外国人の集団は朝鮮人ですから。外国人というアメリカと連想するのは間違っている。ベ平連は、初期はそういう考えを持っていったんだが、運動の中でその考え方が変わったね。

関川 初期、外国人とはアメリカ人のことでしたか。

鶴見 アメリカに対抗しているわけで、アメリカのベトナム政策に対抗するアメリカ人にも呼びかけた。「脱走兵、出ろ！」という英語のビラを書いて横須賀で撒いた。そのときは、脱走兵は出ないと思っていた。そしたら実際に出てきたんだね。もう大変な大騒ぎだね。

関川 でも、出てきた脱走兵は、わざといるんですが、不良少年みたいな子どもたちだったでしょう。

鶴見 そうです。

関川 つまり、政治信念などとは無縁のタイプですね。

鶴見 わたしと同じ。

関川 同じですか。

鶴見 わたしは信念があって、〇歳のときからお袋に対抗していたんじゃない。「こうしろ」

といわれることに反対したいからなんです。「いま、おっぱい飲め」ということに「いやだ」ということ。それだけなんです、それだけ。

関川 その青年たちも同じだと。

鶴見 同じです。

関川 彼らには運動のイメージからすると、もちろん新聞という濾紙を通してですけど、政治信念があったように、受け取りました。

鶴見 あった人もいます。だけど、正確に全部きちんとその理論をいえる人は一人だけしかいなくて、それはスパイだった。彼が裏切ったので、付き添っていた山口文憲は北海道でやられた。

関川 スパイのせいですか。

鶴見 彼一人が若い人の中で警察にいつときひつぱられた。彼は立派な男です。

なぜ交換船に乗ったか

関川 話を戻していいですか。

戦時中は、いつまでジャワにおられたんですか。昭和十九年？

鶴見 二度目のカリエスが出てきた後、わたしの後がまに数人入れたんです。それで、新聞が

できるようになったので、わたしは解放されて、送り返されることになった。ジャワから船に乗ってシンガポールに、シンガポールから最後の輸送船団で帰ることになったんだが、アメリカの艦隊の動きがそのたびに入ってくるので、輸送船団は港から出て行つては帰つてくる、出て行つては帰ってくるという調子でね。兵隊の中で暮らしているわけだから、というよりも船倉という一番下のところだから、慰安婦と一緒に暮らしていた。

関川 船のほとんど底ですね。

鶴見 やつぱり、底から見ろわけね。

そのうちに「あいつ、ほっぽっていいは能率的じゃない」と思う人が出てくるんだね。

関川 使えるものは使え、ですか。

鶴見 わたしは、海軍の第二通信隊というところにもつていかれた。そこでもう一回、通信員だよ(笑)。それから、最後の軍艦「香椎」に乗って帰ってきた。それが、バタビヤに行った初めのドイツ封鎖突破船と違って鈍足なんだね。

関川 古い船でしょう。

鶴見 練習巡洋艦。あらゆる機能を持っていて練習するわけだけど、戦闘になれば必ず負けるという、そういう巡洋艦だった。鈍足でずーっときて下関に昭和十九年二月初めに着いたら雪が降っていたね。その軍艦「香椎」は、それからもう一遍シンガポールに戻っていく途中で、アメリカの機動隊とぶつかって撃沈。